

「人生で最も忙しい日」

庄司 俊介

## 【あらすじ】

結婚を控えた石川真琴は両家の間で心底悩んでいた。地元名古屋の熱田神宮での結婚式の準備に張り切る父・信雄。一方、東京にいる婚約者の城ヶ崎修也とその母・美鈴は東京のチャペルでの結婚式の準備に余念がない。両家とも自らの地元での挙式が当然と考え、準備を進めていた。加えて、最も縁起の良いと言われる一粒万倍日の天赦日の挙式に両家ともこだわり、日取りも重なっていた。

両家の結婚式への熱量に圧倒され、真琴は結婚式が同日に名古屋と東京でダブルブッキングになってしまっていることを言い出せずにいた。ひよんなことから両方の披露宴にそれぞれ大物政治家の列席も決まり、ますます窮地に立たされる真琴。

追い込まれた真琴は、真実を黙ったまま同日の名古屋と東京両方の結婚式を敢行する計画をたてる。午前の熱田神宮での結婚式では役者を雇い、修也とその両親を演じてもらう。

披露宴後、新幹線に飛び乗り、午後の東京の結婚式に間に合わせる綱渡りの計画で、東京の式では真琴の家族に代役を立てる算段だ。

唯一事情を打ち明けていた姉・和葉の協力もあり、熱田神宮の結婚式、披露宴を辛うじて乗り切る。しかし、真琴が飛び乗った新幹線は信号機故障で名古屋駅から動けずにいた。

計画が頓挫し、真琴が新幹線の中で呆然としていたところに突如、信雄が現れる。状況を知った和葉が信雄に助けを求めたのだ。信雄は真琴を高層ビルの屋上に連れていくと、信雄が旧友の鵜飼に頼んでいたヘリがあった。東京に向かうヘリの機内で、真琴は鵜飼に二つの結婚式を敢行した真情を吐露する。

真琴は東京での挙式に間一髪間に合う。式後、祝福のフラワーシャワーを浴びながらチャペルから出てくる真琴と修也。チャペルの向かいの通りでは後から追いついた信雄と母の春子、和葉が拍手をしている。その様子に気づき、真琴の顔は、ぱあっと明るくなった。

【登場人物】

石川真琴（28） 新婦

石川信雄（58） 真琴の父親

石川春子（56） 真琴の母親

石川和葉（30） 真琴の姉

城ヶ崎修也（29） 新郎

城ヶ崎孝一（59） 修也の父親

城ヶ崎美鈴（57） 修也の母親

鶉飼昇（58） 信雄の旧友

沢口詩織（32） グレースホテルウエディ

ングプランナー

大崎由紀（28） 熱田神宮会館ウエディン

グプランナー

藤谷康介（31） 新郎の代役

西村千夏（28） 真琴の友人

相川友里（28） 真琴の友人

常盤美帆（28） 真琴の友人

山城和代（60） 真琴の伯母

下山宏樹（53） 料理長

司会

巫女  
神職  
車掌  
商店主  
商店街客

1〇 グレースホテル・外観

東京都心の高級ホテル。

2〇 同・ブライダルルーム

城ヶ崎修也（29）とその母・城ヶ崎

美鈴（57）が試着室の前にいる。

ウエディングプランナーの沢口詩織

（32）が試着室のカーテンを開ける

と、純白のウエディングドレス姿の石

川真琴（28）が現れる。

美鈴「まあ、素敵！　ねえ、修也」

修也「うん、よく似合ってる」

美鈴「やっぱり花嫁は純白のウエディングド

レスよね」

修也「母さん、はしやぎすぎでしょ」

美鈴「なに言ってるの。ウエディングドレス

は女性の永遠の憧れよ。ねえ、真琴さん」

真琴「あ、はい」

美鈴は別のドレスを見て

美鈴「ねえ、あっちのドレスも着てみる？　い

いわよね？」

詩織「はい、もちろんでございます」

真琴「あ、あの……、お義母さま」

美鈴「なあに？」

真琴「あの……、例えばなんですけど……」

美鈴「ええ」

真琴「例えばの話ですよ」

美鈴「なによ。早くおっしゃいなさい」

真琴「和装なんてのは、いかがでしょう？」

美鈴「ダメよ。そんなのは絶対にダメ。結婚

式はウェディングドレスでなくちゃ」

修也「もう、自分が着られなかったからって」

真琴「え」

美鈴「私はウェディングドレス着てチャペル

でしたかったのに、明治神宮で、着物で結

婚式させられたのよ。もう人生の大惨事」

修也「また言う？ それ」

美鈴「だから、修也のお嫁さんには、絶対に

チャペルでウェディングドレス着させてあ

げたいの」

真琴「でも、こんな立派なホテルで結婚式と  
いうのも……」

美鈴「そこは任せておいて」

真琴「……」

3 ○ 静岡・富士川を越える鉄橋

東海道新幹線が西へ走っていく。

4 ○ 熱田神宮

本殿にお参りする人たち。

5 ○ 同・熱田神宮会館・神前式結婚式場

真琴とその父・石川信雄（58）、母・

石川春子（56）がウェディングプラ

ンナーの大崎由紀（28）に式場内を

案内されている。

由紀「こちらが式場になります」

春子「なんだか神々しいわあ」

信雄「ここは本殿のすぐそばだな」

由紀「指輪を交換したあとは、こちらで巫女

が神楽を奉奏いたします」

春子「すてきねえ」

信雄「どうだ真琴、やっぱり熱田さんの式場

はええだろう？」

真琴「そうだね……」

#### 6 ○ 同・参道

真琴と信雄、春子が歩いている。

信雄「熱田さんで結婚式するのが名古屋の子  
の幸せだな」

真琴「……」

信雄「お宮参りも七五三も全部熱田さんだっ  
たで」

春子「真琴の結婚が決まって、お父さん、め  
ちゃんこ張り切っとるでね」

信雄「結婚式はド派手にいくでな」

真琴「今時、そういうのはやらないから」

信雄「なに言っとる。東京モンに名古屋のど  
えりゃあ結婚式を見せたるがね」

春子「今日は、修也さんはどうしたの？」

真琴「今、忙しいみたいで」

信雄「下見に来ないなんて、しょうもない男  
だで」

真琴「仕方ないでしょ」

春子「わざわざ名古屋まで来るのもえらいで  
しょう」

信雄「新幹線でびゃーっと来ればとすぐだが  
や」

春子「無理言っって、名古屋で結婚式させても  
らうんだで」

信雄「こっちは清洲越しから続く名門だで、  
名古屋でやるのは当然だが」

春子「向こうさんは立派な家柄なんでしょう」

真琴「お義父さまは東洋銀行の頭取だっって」

信雄「所詮サラリーマン頭取だろう。こっち  
は大須で店構えとるんだで」

春子「お父さん、もうええがね」

信雄「真琴、せっかくだで蓬萊軒いこまい」

真琴「うん……」

信雄「どうした？ 元気ねえがや。真琴、ひ

つまぶし好きだろう？」

真琴は空元気をだし、笑顔で

真琴「うん、ひつまぶしいいね」

7〇 東京駅・東海道新幹線ホーム

新幹線から降りてくる乗客の中に真琴の姿もある。

8〇 カフェ（夕）

真琴と修也がテーブル席にいる。

真琴「修也はやっぱりグレースホテルで結婚

式やりたい？」

修也「どうした？ 今さら」

真琴「チャペルの結婚式がいい？」

修也「オレがつていうより、親が楽しみにし

てるからさ」

真琴「私の実家、名古屋で代々続くういろいろ

屋なのね」

修也「知ってるよ」

真琴「名古屋には熱田神宮が……」

スマホの振動音がして、修也はポケットからスマホを出し、画面を見る。

修也「ごめん、ちょっと」

修也は席を立ち店外へ。

真琴は店外で通話する修也を見ている。

×

×

×

修也が席に戻ってきて

修也「ごめんごめん」

真琴「あの、話の続き……」

修也「今日、グレースホテルのレストラン予約してるんだ。披露宴を担当する料理長の店だからさ。話はそこで聞くよ」

真琴「ここじゃだめ？」

修也「もうすぐ予約の時間だから、行こう」

伝票を持って立ち上がる修也。

困惑した表情の真琴。

90 グレースホテル・レストラン（夜）

瀟洒な店内。

修也と真琴が食事をしている。

修也 「さっき言いかけた話って？」

真琴 「あ、うん、あのね……」

その時、料理長の下山宏樹（53）が

二人のテーブルへやってくる。

下山 「城ヶ崎様」

修也 「あ、料理長」

下山 「本日はお越しくださり、ありがとうございます  
ございます」

修也 「披露宴はよろしくお願いしますね」

下山 「お任せください。思い出に残る披露宴  
になるよう腕を振るいます」

修也は真琴を紹介し

修也 「あの、婚約者の真琴です」

真琴 「はじめまして。石川真琴と申します」

下山 「披露宴を担当します下山と申します。

お料理、いかがですか」

真琴 「上品で、とてもおいしいです」

下山 「ありがとうございます。披露宴も楽し  
みにしててください」

真琴 「はい。こんな美味しいお料理が出てき

たらゲストの方も喜ぶと思います」

修也「あの、当日のデザートなんですけどね」

下山「はい」

修也と下山の会話が続く。

小さくため息をつく真琴。

100 名古屋駅・東海道新幹線の改札

改札を通る多くの乗客の中に真琴の姿。

110 名古屋・大須商店街

アーケード内にたくさんのお店が並ぶ。

真琴が独り言を口にしながら歩いている。

真琴「私たちやっぱり東京で結婚式を……」

商店街客が真琴に声をかける。

商店街客「真琴ちゃん、やっとかめだなも」

真琴「どうもご無沙汰してます」

商店街客「結婚するんだって？おめでとさん」

真琴「あ、ありがとうございます」

近くの店から商店主が声をかける。

商店主「真琴ちゃん、熱田さんで結婚式やるんだってね。おめでどう」

真琴「ありがとうございます。あの、どうして熱田神宮でやるって？」

商店主「お父さんが自慢して歩いとるよ。菓子まきもやるって張り切とるでね」

真琴「え、菓子まき……？」

商店主「ああ、盛大にっ」

真琴「本当にご迷惑おかけしてます」

商店主「商店会長も、ご成婚祝いを派手にやるまいと力入とるでね」

真琴「うわあ、やめてやめて」

商店主「賑やかな嫁入りは久しぶりだで、私らも楽しみよ」

真琴「本当にすみません、父がお騒がせして」

真琴が頭を下げて、再び歩き出すと、商店街のあちらこちらから、祝福の聲がかかる。

方々に頭を下げ、恥ずかしそうに歩く真琴。

1 2 ○ 尾張うしろ本舗・店先

年季の入った看板が掲げてある老舗。

1 3 ○ 同・店舗内

春子が店番してるところに不機嫌そう

な真琴が入ってくる。

真琴「ただいま」

春子「あら、おかえり」

真琴「お父さんは？」

春子「中におるよ。(店とつながる家の中に向

かって)お父さん、真琴が帰ってきたでね」

真琴「もう、結婚のこと勝手に言いふらすの

やめてよね」

春子「なにプリプリしとんの」

真琴は靴を脱いで居間に入っていく。

1 4 ○ 同・店舗から続く居間

のれんをくぐり、真琴が入ってくると

鮮やかな色打掛が飾ってある。

真琴「え……」

奥から信雄が出てきて

信雄「おお、真琴、おかえり」

真琴「お父さん、なに、これ？」

信雄「ええだろう。松坂屋で買ってきた」

真琴「レンタルじゃなくて？」

信雄「熱田さんで結婚式やるんだで、レンタルではいかんがね」

真琴「これいくらのよ」

信雄「東海銀行で定期をパーっと解約してな」

奥から真琴の姉・石川和葉（30）が

出てくる。

和葉「お父さん、東海銀行じゃなくて、三菱

UFJでしょう」

信雄「どっちでもええて」

和葉「花嫁さん、おかえり」

真琴「お姉ちゃん」

和葉「熱田神宮で結婚式やるなんて孝行娘ね」

信雄「和葉の結婚式はハワイだったで、出戻ってきたでな」

真琴「それが原因じゃないでしょ」

和葉「まあ、そういうことにしといてよ」

信雄「真琴の結婚式は熱田さんだで安心やて」

真琴「あの、お父さん、その話なんだけどね」

信雄「真琴、せっかくだで、ちよつと打掛に

袖を通してちょう」

真琴「え、そんな、いいって。もったいない」

和葉「真琴、着てみなつて。お父さん、老後

資金はたいて買ったんだから」

真琴「お父さん、その前にね。大事な話が」

信雄「そんなの後でええて。ちよつと着てみ

やあ」

信雄は真琴を打掛へと引っ張っていく。

150 同・二階・姉妹の部屋（夜）

照明は消されていて暗い室内。

二段ベッドの上に和葉、下に真琴が寝

ている。

真琴「お姉ちゃん、もう寝た？」

和葉「まだ」

真琴「もしね、もしもの話だよ」

和葉「なによ、もったいぶって」

真琴「私が熱田神宮で結婚式をやらないと言  
ったら、お父さん、どうなるかな」

和葉「血管切れて、死ぬね」

真琴「え……、死ぬの？」

和葉「お父さん、また血圧高いみたいだから」

真琴「そう……」

和葉「なに？　結婚式やらないの？」

真琴「いや……。そういうわけじゃなくて」

和葉「私の分も親孝行してよね」

真琴「ずるいよ、そういうの……」

160 静岡・富士川を超える鉄橋

東海道新幹線が東へ走っていく。

170 城ヶ崎家・外観

立派な邸宅。

180 同・リビング

美鈴が夫・城ヶ崎孝一（59）にタブレットで真琴のウェディングドレス姿の写真を見せている。  
そばには真琴と修也がいる。

美鈴「ねえ、素敵でしょう？」

孝一「本当だ。真琴さん、とても似合ってる」

真琴「ありがとうございます」

美鈴「やっぱり、花嫁は純白のウェディングドレスね」

真琴「あ、あのお義母さま」

美鈴「なあに？」

真琴「あの、仮にですよ。仮の話なんですけど……」

美鈴「どうしたの、そんな遠回しに」

真琴「結婚式を神社でやりたいなんて言ったら……」

美鈴「破談ね」

真琴「え……」

美鈴「そんな嫁は城ヶ崎家にはいらないわ」

真琴「あ、あ、冗談です。冗談」

美鈴「悪い冗談やめてちょうだい」

孝一「ああ、そういえばな。大泉元総理が披露宴に来てくれることになったぞ」

一同「ええ！」

孝一「この前、大学のOB会でお会いしたんだ。たまたま修也が大学の時に書いた卒論の話をしたら、えらい上機嫌でな」

修也「郵政民営化十年目の功罪」

孝一「そう。勢いでその修也が結婚するから披露宴に招待させてくれませんかとお願ひしたら、快諾してくれてさ」

修也「すごいねそれ」

孝一「大泉さん、だいぶ飲んだから安請け合ひしちゃったのかもな」

美鈴「大泉総理が来てくださるなんて、まずまず結婚式が待ち遠しいわ」

孝一「元総理ね」

美鈴「総理も元総理も一緒よ」

真琴「あ、あの、お義母さま」

美鈴「なあに？」

真琴「私、あんなに立派なホテルで結婚式を  
させていただくのも申し訳なくて」

孝一「真琴さん、遠慮しないでよ」

美鈴「グレースホテルの社長さんと孝一さん  
は、幼稚舎からの同級生なのよ」

真琴「慶応の……？」

美鈴「城ヶ崎家はみんな慶応なの」

真琴「そうなんですか」

美鈴「真琴さんはどちらの大学を出ている  
の？」

真琴「私は名大めいだいです」

美鈴「明治大学？」

真琴「名古屋大です」

美鈴「ああ、地方の大学ね」

修也「母さん、名古屋大は旧帝大だよ」

美鈴「でも、総理大臣は輩出してないでしょ  
う？」

真琴「ノーベル賞なら何人か……」

美鈴「ノーベル賞より総理大臣でしょう。ね  
え？」

真琴「ですね……」

美鈴「大泉総理がいらしてくださるのは、一粒万倍日の天赦日に結婚式をするご利益ね」

真琴「あの、別の日ではダメなのでしょうか」

……？」

美鈴「ダメに決まってるでしょう！ 無理を

言って、一粒万倍日の天赦日に式場をおさえてもらったのよ。孝一さんのメンツつぶ

す気？」

真琴「いえ、そんなつもりは……」

美鈴「せっかく大泉総理が来てくださるなら、

ぜひスピーチをお願いしたいわね」

孝一「うん、頼んでみるよ」

美鈴「大泉総理のスピーチ、楽しみねえ」

孝一「だから元総理ね」

190 同・外観（夜）

窓から明かりがもれている。

200 同・玄関（夜）

真琴が靴を履き、帰るところ。

修也は真琴を送っていく様子。

見送る美鈴と孝一。

修也「じゃあ、車だしてくるから」

真琴「うん、ありがとう」

修也は先に出ていく。

真琴「晩ご飯までごちそうになってしまった」

美鈴「大勢で食べた方が楽しいわ」

孝一「また来てくださいね」

孝一のスマホが鳴る。

孝一「あ、ちよつと」

孝一はスマホを持ってリビングへ。

真琴は美鈴を見て

真琴「あの、お義母さま」

## 210 東海道新幹線・車内

真琴が座席でスマホを見ており、画面

は石川家のグループLINE。

真琴は『結婚式は東京でやることにな

った』と書いて送信しようとするが、

逡巡して文章を消す。

2 2 〇 名古屋・大須商店街

真琴が立ち尽くしている。

商店街のアーケードに横断幕が掲げられて  
れている。

『祝・ご成婚 尾張ういろう本舗 石

川真琴さん』

2 3 〇 尾張ういろう本舗・店内

真琴は店の中に入ると、店番している

春子に

真琴「ねえ、あの横断幕なによ！」

春子「あら、真琴、すごいでしょ。商店街  
の皆さんが作ってくれたんだで」

真琴「もう！ お父さんは？」

春子「中におるよ。どうしたの？ 帰って  
くるたびプリプリして」

2 4 〇 店舗から続く居間

のれんをくぐり、真琴が勢いよく入ってくると信雄が中日新聞を読んでいる。

真琴「ねえ、お父さん！」

信雄「おう、真琴、おかえり」

真琴「あの横断幕なによ」

信雄「ええだろう」

真琴「恥ずかしいからやめてよ」

信雄「なに言っとる。商店街の人たちがせっ

かく作ってくれたんだで」

真琴「お父さんがベラベラベラ吹聴して

まわってるからでしょ」

信雄「娘が結婚するんだで、隠す必要なんて

ねえがや」

真琴「そうじゃなくて、私はもっと普通にし

たいの」

信雄「これが普通だで。みすぼらしい嫁入り

なんてあらずか！」

和葉が居間に入ってきて

和葉「どうしたの？」

真琴「お姉ちゃん、あの横断幕」

和葉「アンタ、みんなに愛されてるんだよ」

真琴「でも……」

和葉「どうした？ マリッジブルー？」

信雄「なんやそれ？」

春子が居間に入ってきて

春子「結婚を前に、女は悩むことも多いんだ

でね」

信雄「悩むことなんてあらせんがや」

和葉「みんな真琴の結婚を祝いたいんだって」

真琴「……」

真琴は暫し考えた後、意を決した表情  
に。

真琴「あのね、お父さん、お母さん」

春子「どうしたの？ 深刻な顔して」

真琴「あの……」

信雄「そうだ、真琴、服部家具で嫁入り道具

一式揃えたでな」

真琴「え……」

信雄「トラックも手配しただよ」

和葉「でた！ あの絶対にバックしないトラ

ツク

信雄「東名バーっと走って、東京の新居まで届けたるで」

真琴「ちよっと待ってよ。相談もしないで」

信雄「遠慮することねえがや」

和葉「なんか盛り上がってきたね」

信雄「和葉も熱田さんで結婚式やりとうなっ  
たか？」

和葉「でも相手がなあ」

信雄「商店会長にいい人探してもらうで」

和葉「本当？ バツイチでもいいのかな」

信雄「和葉なら引く手あまただで」

春子「お父さん、そんなこと言って大丈夫なの？  
もう定期預金も解約しとるで」

信雄「まだ生命保険があるがや」

春子「もう、うちがつぶれるがね」

真琴「ねえ、聞いてよ！」

春子「なあに？ 真琴」

真琴「あのね……」

和葉「どうしたのよ」

真琴「私……、やっぱり……」

信雄「おう、それよりな。海村元市長が結婚式にくると言っとるで」

和葉「え、元市長って、あのお騒がせ男」

真琴は小さくため息をつく。

和葉「お父さん、海村さんと知り合いなの？」

信雄「海村さんは旭丘高校の先輩だがね」

信雄がスマホを見せると、信雄と海村

元名古屋市長がスナックで肩を組んで

カラオケしている写真。

和葉「ホントだ、元市長」

信雄「熱田さんで娘の結婚式やるから来てち

ょうと言ったら、二つ返事でOKだがね」

和葉「ならさ、小村知事にも声かけられない？」

信雄「ダメダメ。あの二人、仲悪いで」

和葉「そうだったそうだった」

真琴「もう、ふざけないでよ……」

春子「真琴、なにか言いたいことあったんじ

ゃないの？」

真琴「なんだか情報量多くて、ちよっと混乱

してるからまたあとで……」

信雄「いやー、結婚式を一粒万倍日の天赦日にしてよかったがや。来賓が増えたでね」

真琴「別の日じゃダメなの？」

信雄「当たり前だがや！ 何のために無理を通してこの日に式場をおさえたと思っとる」

真琴「もう、いつだっていいじゃない……」

信雄「どえりゃあ縁起のいい日だで、日取りだけは絶対に譲れん」

真琴「日取りにこだわるのは一緒なんだよな」

信雄「なにが一緒だって？」

真琴「ううん、なんでも……」

25〇 同・台所（夜）

真琴と春子が食器を洗っている。

春子「お父さん、張り切っとるでしょう」

真琴「やり過ぎだよ」

春子「精一杯祝ってやりたいんやて」

真琴「にしてもさあ」

春子「和葉の時はハワイだったし、私たちは

駆け落ち同然だったで結婚式してないから」

真琴「お父さんとお母さん、そうだったの？」

春子「だもんでね。お父さんはすべてを真琴に注ぎ込んどるわけ。真琴の結婚を誰よりも喜んどるでね」

真琴「……」

真琴の手は止まり、蛇口からは水が出続けている。

## 260 同・二階・姉妹の部屋（夜）

和葉が椅子に座り、真琴はベッドに腰かけている。

和葉「今の話、本当なわけ？」

真琴「うん……」

和葉「まじで信じらんない。結婚式のダブルブッキングなんて聞いたことないよ」

真琴「だって、どっちの家もこだわりが強いぎるんだもん。日取りも場所も」

和葉「なんだっけ？ あの縁起のいい」

真琴「一粒万倍日の天赦日」

和葉「アンタにとっちゃ厄日だね」

真琴「私の希望なんて聞かれもしなかった」

和葉「で、どうすんの？」

真琴「どうしよう……」

和葉「アンタねえ」

真琴「今さらどっちにも言い出せなくて……」

和葉「真琴は昔から誰にでもいい顔するから  
なあ」

真琴「偉い人たちまで来るなんて、バレたとき  
きの傷口が大きすぎる」

和葉「大泉元総理と海村元市長かあ。格で言  
ったら大泉元総理かな」

真琴「え」

和葉「でも、大泉さんは引退してるけど、海  
村さんは国会議員に返り咲いたしね」

真琴「お父さんは海村さんにスピーチ頼むみ  
たい」

和葉「またいらんこと言いそうね」

真琴「向こうは大泉元総理スピーチに頼むつ  
て」

和葉「大泉劇場の幕が上がるのか」

真琴「どうしてそんなお偉いさんたちが……」

和葉「ドタキャンで、どっちの顔に泥を塗る

かだね」

真琴「ちよつとやめてよ」

和葉「海村さんだったら、結婚指輪をかじっ

てもらえるかもよ」

真琴「もう、ふざけないで」

和葉「大泉対海村かあ。悩むところだねえ」

真琴「ちよつと、お姉ちゃん、楽しんでない？」

## 270 名古屋の街中

歩いてきた真琴が喫茶店の前で立ち止

まると、店内の窓際の席に藤谷康介（3

1）が座っているのが見える。

## 280 喫茶店・店内

テーブル席で資料を見ながら話し合っ

ている真琴と藤谷。

290 大須商店街（夜）

大須観音の奥に商店街が続く。

300 石川家・二階・姉妹の部屋（夜）

二段ベッドの上から和葉が飛び降りてきて、真琴の顔を覗き込む。

和葉「アンタ、それ、本気なの？」

真琴「うん、代役は全部プロに頼んだ」

和葉は、真琴と並んでベッドに座る。

和葉「それ、大博打だよ。本当にやる気？」

真琴「もうこうするしかないの」

和葉「アンタ、そうまでして」

真琴「だいぶお金かかったから、お姉ちゃん、

ご祝儀はずんでよね」

和葉「ご祝儀というよりカンパだよ」

真琴「結婚式は楽しかって聞いてたのに」

和葉「八方美人の代償だね」

真琴「こんなことになるなんて思いもしなかった」

和葉「熱田神宮で披露宴までして、東京の結

婚式に間に合うの？」

真琴「12時30分名古屋発ののぞみに乗れば、都内の乗り継ぎも含めてギリギリ間に合う。それを逃したら終わり」

和葉「西村京太郎も真っ青ね」

真琴「鉄オタ並みに調べたから」

和葉「でもさ、代役の新郎でバレない？」

真琴「お父さんもお母さんも、修也とは結婚の挨拶に来た時と両家の顔合わせであっただけだし」

和葉「二回会ってるんだよ」

真琴「代役は雰囲気似た人だし、当日はメガネをかけてもらうから」

和葉「不安しかない」

真琴「だからお姉ちゃんの協力が必要なの」

和葉「え？」

真琴「修也さんメガネかけるだけで印象だいぶ変わるねって、お父さんとお母さんをうまくコントロールしてほしいの」

和葉「そんなさあ、荷が重いよ」

真琴「年取ると、若い人の顔はみんな同じに見えるっていうじゃない？ だから大丈夫」

和葉「お父さんもお母さんも、まだボケてないからね」

真琴「お姉ちゃんの協力があって、このミツシヨンは成功するの」

和葉「なにがミツシヨンよ。犯罪の片棒を担ぐの嫌だよ」

真琴「犯罪じゃないし」

和葉「騙すんだから、似たようなもんでしょ」

真琴「お願い、お姉ちゃんには迷惑かけないから」

和葉「十分迷惑かかってるからね」

真琴「え、そう？」

和葉「その凶々しさ、外で出しなさいよ」

真琴「それができれば……」

和葉「修也さんのご両親も代役なんて、お父さんもお母さんもさすがに気づくんじやない？」

真琴「お姉ちゃん、修也の両親のこと思い出

せる？」

和葉「顔合わせで会ったしね」

真琴「もし似た雰囲気の人が来ても、この人絶対に違えますと断言できる？」

真琴は強い目で和葉を見る。

和葉「いや、絶対とは……」

真琴「人の記憶なんていい加減なもんよ」

和葉「アンタ、強くなったね」

真琴「もう覚悟きめたから」

和葉「東京の結婚式はどうするの？」

真琴「お父さんとお母さん、それにお姉ちゃん  
の代役を立てて乗り切る」

和葉「東京も代役か」

真琴「うん」

和葉「向こうの方たちに気付かれない？」

真琴「城ヶ崎家の人たちは、石川家のことな  
んて関心ないし。名古屋のいろいろ屋ぐら  
いにしか覚えてないよ」

和葉「さすが頭取一家」

真琴「これがね、計画の全容」

和葉「東京の結婚式は私がいなくて大丈夫？

完全アウェイだよ」

真琴「城ヶ崎家の方は私がなんとかする」

和葉「立派な家に嫁ぐのを心配してたけど、

アンタ、意外と上手くやれるかもね」

### 3 1 ○ 熱田神宮・外観（夜）

真琴と藤谷が鳥居をくぐり、外に出てくる。

### 3 2 ○ 神宮前駅へ続く道（夜）

真琴と藤谷が並んで歩いている。

真琴「リハーサルどおりやれば、明日は大丈

夫だと思います」

藤谷「あの、この前聞きそびれたんですが」

真琴「はい」

藤谷「なぜ無理して同じ日に名古屋と東京、

二つの結婚式を成立させようとするんですか？」

真琴「私が両家に言いだせなかったことがそ

もその原因なんですが……」

330 石川家・居間（夜）

信雄と春子、和葉がちゃぶ台を囲んで

お茶を飲んでいる。

信雄「真琴、遅ないか。明日は結婚式だで」

和葉「式のリハーサルをしてるみたいよ」

信雄「そんなの前日の晩にするもんか？」

和葉「あ……、お父さんとお母さんに立派な

結婚式を見せたいのよ」

信雄「気持ちは嬉しいけどなあ」

春子「もう帰ってくるでしょう」

信雄「なあ、あれは、ないんかいな？」

春子「あれ？」

信雄「あれだがや」

春子「あれじゃわからんがね」

信雄「ほら、あの三つ指ついて、あるだろう？」

和葉「お父さんお母さん、今までお世話にな

りましたって？」

信雄「まあ、そういうの」

春子「お父さん、もう令和だで」

信雄「たわけ！時代なんぞ関係あるか」

和葉「真琴に頼んでおこうか。お父さんが待ってたよって」

信雄「ええて、ええて。それはええて」

和葉「内弁慶なところ、親子ね」

信雄「なに？」

和葉「ううん。私、お風呂入ってこよう」

和葉が居間を出ていく。

### 340 同・二階・姉妹の部屋（夜）

机の上には新幹線の切符があり、真琴がスマホで乗り継ぎを確認している。

風呂上がりの和葉が入ってきて

和葉「あ、帰ってたんだ」

真琴「うん」

和葉「代役の人、リハーサルどうだった？」

真琴「プロだからね。でも、心配は尽きない」

和葉「ねえ、お父さんお母さん今までお世話になりましたって、やらないの？」

真琴「準備が忙しすぎて忘れてた」

和葉「お父さん、楽しみにしてたのに」

真琴「明日は時間ないしな。動画撮ってL I

N Eで送っとくか」

和葉「ドライすぎる」

真琴「ないよりましでしょ」

和葉「アンタ、たくましくなったよ」

真琴「身から出た錆だから」

和葉「私が協力できるのは、名古屋駅に送る

までだよ」

真琴「うん、そこからは自分で何とかする」

和葉「明日は早いんだから、もう寝たら」

真琴「緊張して寝られそうにない」

和葉「私も」

### 3 5 〇 尾張うしろ本舗・前（朝）

店舗のシャツターは閉まっているが、

大勢の老若男女が集まっている。

シャツターが開き、真琴が出てくると

みんなから祝福される。

真琴「ありがとうございます。これから始まりますんで」

二階の窓が開き、信雄が顔を出す。

信雄「今から菓子まきやるでね！」

店舗前の人たちは一気に盛り上がる。

隣の窓が開き、春子と和葉も顔を出す。

春子「慌てんでも、ようけあるでね」

店舗前の盛り上がりは最高潮。

和葉「じゃあ、いっくよー！」

信雄と春子、和葉がいつせいに二階から菓子を大量にまき始める。

それを歓喜しながら受け取る人々。

それを見守っている真琴。

### 360 熱田神宮・外観

鬱蒼とした森に囲まれた社。

### 370 同・境内

神職と巫女の先導で、白無垢を着た真琴と羽織袴姿の藤谷に続き、参列者た

ちが歩いている。

380 同・熱田神宮会館・神前式結婚式場

真琴と藤谷が三々九度の結盃を行う。

親族席には信雄、春子、和葉。

信雄「修也さん、なんか雰囲気変わったか？」

春子「相変わらずイケメンだね」

信雄「今日は、なんや、メガネかけとるで」

和葉「コンタクトを忘れたみたいよ」

信雄「そんなおつちよこちよいで大丈夫かい  
な」

春子「かわいいところあるがね」

信雄「でも、あんな感じだったか……」

和葉「メガネかけるとだいぶ印象変わるから」

信雄「そうか……」

和葉「お父さん、修也さんとほとんど話して  
ないでしょう。挨拶に来た時もまともに修  
也さんの顔見ないで」

春子「男親は感傷に浸り過ぎだでね」

信雄「そんなことねえがや。ちゃんと覚えと

る。うん、あんな感じの美男子だった」

和葉「でしょう」

信雄「でも、もうちっと背が低かったような

……」

和葉「背が伸びたのよ」

信雄「大人でも伸びるんかいな？」

和葉「最近はね」

信雄「そうか。いや、でもな……」

和葉「だったら、修也さんに直接聞いてきた

ら？ 最近背が伸びましたかって」

信雄「ええて、ええて。それはええて」

和葉のほっとした表情。

### 390 同・披露宴会場

大勢の招待客でにぎわっている。

高砂は空席。

司会がマイクを持つ。

司会「皆さま、お待たせいたしました。お色

直しが終わりました、新郎新婦が入場いた

します。盛大な拍手でお迎えください」

扉が開くと、信雄の用意した色打掛を着た真琴と藤谷が入場してくる。親族席では信雄と春子、和葉が拍手をしている。

春子「お父さん、あの打掛」

信雄「うんうん……」

色打掛を着た真琴を見て涙を拭う信雄。

#### 400 城ヶ崎家・リビング

修也と孝一がソファーに座っている。

濃紺のドレスを着た美鈴が入ってきて、ポーズをきめる。

美鈴「これなんてどうかしら」

孝一「さっきの方がいいかもなあ」

美鈴「そう？」

修也「ねえ、ファッションショーはいつまで続くの？」

美鈴「だって新郎の母なんだから。写真にもたくさん写るでしょ」

孝一「普通、留袖じゃないの？」

美鈴「そういう、ザ・姑みたいのは嫌なの」

孝一は苦笑い。

美鈴「もう一度さっきの着てみる」

美鈴は急いでリビングを出ていく。

孝一「母さん、張り切ってるだろ」

修也「やり過ぎでしょ」

孝一「修也の結婚を一番喜んでるのは母さんだからな」

修也「それはありがたいけど」

孝一「ウェディングドレス命の母さんだけど、いろいろと二人のこと考えてさ」

美鈴が慌てて戻ってきて

美鈴「ねえ、ネックレスはこれでいいかしら？」

孝一・修也「似合ってる」

#### 4 1 〇 熱田神宮会館・披露宴会場

照明が落とされ、プロジェクターでビ

デオメッセージが流されている。

高砂では、真琴と藤谷が並んで座っている。

真琴がウェディングプランナーの由紀を呼ぶ。

真琴「あの、時間おしてませんか？」

由紀「これぐらいは許容範囲ですよ」

真琴「必ず時間通りで終わらせてほしいんです。このあと予定が詰まってるんです。」

由紀「このあとにご予定ですか？」

真琴「あ……、この会場、午後も予約が入ってますよね」

由紀「次のお客様に影響するほどの遅れではありませんので、ご安心ください」

真琴「お願い。1分たりとも遅れないで。私の両親への手紙の朗読は、はしょっていいですから」

由紀「披露宴のクライマックスですよ」

真琴「手紙は渡しておくからいいです」

由紀「そうですか……」

真琴「うちの父の挨拶も、新郎の挨拶も全部カットで」

由紀「それでは披露宴が締まらないですよ」

真琴「いいんです。時間通り終わらせることがなによりも大事なんで」

由紀「わかりました……」

由紀はさがっていく。

藤谷「どうかされましたか？」

真琴「新郎は仕事に徹してください」

藤谷「はい」

ビデオメッセージが終わり、場内が明るくなる。

藤谷は目一杯拍手をする。

由紀は司会にメモを渡す。

メモを見て、驚いて由紀を見る司会。

由紀は黙ってうなづく。

#### 420 城ヶ崎家・リビング

テレビには幼い修也が映ったホームビデオが流れており、それを見て涙ぐんでいる美鈴。

孝一が入ってきて

孝一「そろそろ僕たちも行こうか」

孝一はテレビを見て

孝一「ずいぶんと懐かしいのを」

美鈴「これ、修也がうちに来て、初めての誕生日」

孝一「そうか」

美鈴「こんなにかわいい笑顔で」

美鈴は目頭をハンカチでおさえる。

美鈴「私、今日、泣いちゃうかも」

孝一「いいさ。泣くのは花嫁の親だけの特権じゃない」

#### 430 熱田神宮会館・披露宴会場・中

真琴と藤谷が信雄と春子に花束を渡している。

若干戸惑った表情の信雄。

司会「新郎新婦の退場です。皆さま盛大な拍手でお見送りください」

驚く表情の信雄。

披露宴会場から出ていく、真琴と藤谷。

44〇 同・披露宴会場・外

真琴と藤谷、由紀は招待客を見送る準備をしている。

真琴「見送りは15分以内マストで」

藤谷「はい」

真琴「ゲストはどんどん流していきますんで、

早めにはけさせるようにしてください」

由紀「あ、はい、わかりました」

45〇 同・披露宴会場・中

退場を待つ招待客たち。

信雄、春子、和葉が円卓の周りに座っている。

信雄「なんで両親への手紙の朗読がねえがや」

和葉「ちゃんと手紙はもらったじゃない」

信雄「花嫁が手紙読むのが一番盛り上がりるところだが。なんでそれがない？」

春子「お父さん、楽しみにしてたのにね」

信雄「オレの最後の挨拶もどうなった？」

信雄はポケットから挨拶のカンペを出

し、テーブルの上に放り投げる。

和葉「時間がおしてたみたいよ」

信雄「時間がって。オレの見せ場だで」

和葉「縁起のいい日だから、今日は披露宴も

たくさん入っているんじゃない？」

信雄「だからって、ほんのちつとの遅れも許

されんのか。生放送じゃないんやて」

和葉「ほら、海村さんのスピーチ。あれがえ

らい長かったでしょう」

春子「名古屋から総理を狙うとか言とったね」

信雄「あのたわけめ。自分が主役と勘違いし

とる」

和葉「名古屋一の目立ちたがり屋だからね。

お父さんの人選ミスだよ」

信雄「くそー、せっかく、せっかく……」

信雄はテーブルに突っ伏して悔しがる。

#### 460 同・披露宴会場・外

真琴と藤谷が列席者を見送っている。

真琴の友人の西村千夏（28）、相川友

里（28）、常盤美帆（28）がくる。

千夏「真琴、幸せにね」

真琴「うん、ありがとう」

友里「旦那さん、イケメンね」

真琴「あのさ、後ろにもまだたくさん待って

いる人がいるから」

美帆「ねえ、写真撮ろうよ」

真琴「え、写真？ 別にいいでしょ」

千夏・友里「撮ろう撮ろう」

美帆はバックの中のスマホを探すが見つからない。

真琴「どうしたの？」

美帆「ちよつとスマホが……」

真琴「写真は、また今度でいいよ」

美帆「えー、ダメだよ。せっかくおしやれし

て来たんだから」

美帆はバックの中を探し続ける。

真琴「バックの中、整理しておきなよ」

美帆「ちよつと待って……」

千夏「私のスマホ使おうか」

千夏がさっとスマホを取り出す。

真琴「ナイス！」

千夏「撮るよ」

千夏が真琴と友里、美帆と一緒に自撮りする。

友里「ねえ、見せて見せて」

真琴「確認はよくない？」

千夏「あ、真琴、半目だ。撮り直そう」

真琴「いい、いい。半目でいい」

千夏「花嫁が半目じゃダメだよ。もう一枚撮ろう」

真琴「これが最後だよ」

千夏「じゃあ、撮るよ」

千夏が真琴と友里、美帆と一緒に自撮りする。

千夏が写真を確認する。

真琴「だから確認はいいでしょ」

千夏「うん、今度はいい感じ」

美帆「盛れそう？」

千夏「加工しよう」

真琴「加工は後でいいって」

友里「ねえ、旦那さん入れてなかったよ」

真琴「いや、もういいでしょ」

友里「修也さん、一緒に撮りましょう」

真琴「修也はいいから」

友里「そんなこと言わずに。ねえ、修也さん」

藤谷「はい、ぜひ」

真琴は、キツと藤谷をにらむ。

藤谷「あ、写真はいいです……」

友里「えー、そんなこと言わないで」

千夏「せつかくなんだから、ねえ」

真琴「絶対に1枚だけだよ。確認もなしね」

千夏「はいはい。じゃあ撮るよ」

千夏が真琴と藤谷、友里、美帆と共に

自撮りする。

友里「ねえ、見せて見せて」

真琴「もう確認はなしなし」

真琴は、由紀にアイコンタクトを送る。

由紀「すみません。後ろのお客様が待ってい

らっしゃいますので」

由紀が千夏と友里、美帆を促す。

美帆「今度みんなが集まろうね」

真琴「うんうん、そうだね」

由紀は、千夏と友里、美帆を送り出す。

真琴の伯母・山城和代（60）がくる。

和代「真琴ちゃん、おめでとう」

真琴「伯母さん、遠いところありがとう」

和代「素敵な方と結婚できてよかった。私も

一安心」

真琴「急がないと帰りの電車、大丈夫？」

和代「なに言ってるの。まだお昼前よ」

真琴「でも、遠いから」

和代「大丈夫よ。その打掛、お父さんが用意

してくれたんだって？」

真琴「伯母さん、本当に電車大丈夫？」

和代「心配性な子だねえ。そうだ、せっかく

だから写真撮ろう」

真琴「もう写真はいいよ」

和代「なに言ってるの。まだ撮ってないでし

よう」

和代はバックの中を探す。

和代「カメラ、カメラ……」

真琴「だから、バックの中は整理しておかな

いと」

和代「あつた」

和代はデジカメを出すが、操作に戸惑っている。

和代「えーと……」

真琴がデジカメを取り上げて

真琴「電源はここ」

真琴が電源を入れてデジカメを和代に戻す。

和代「誰かに撮ってもらわんとね」

真琴「これ、自撮りできないの？」

和代「じどり？」

真琴は和代からデジカメを取り上げ、藤谷に渡す。

真琴「修也、撮って」

藤谷「え、私ですか」

和代「新郎に撮らしちゃだめでしょう」

真琴「いいのいいの、時間ないから」

和代「そんな、時間て……」

真琴「修也、早く早く！」

藤谷「あ、はい」

真琴「はい、伯母さん、こっち」

真琴は和代をそばに寄せる。

藤谷はデジカメを構え

藤谷「はい、チーズ」

撮り終わると、真琴は藤谷からデジカメを奪取し、即座に和代に渡す。

真琴「伯母さん、また今度ね」

和代「もう一枚いいだろう？」

真琴「電車があるうちに帰ってね」

和代「まだ電車は大丈夫だから」

真琴「今日は本当にありがとう」

真琴は、和代の背中を押し、由紀に目で合図する。

由紀「さ、さ、こちらへ。お荷物お持ちしまし  
ょうか」

由紀が和代を誘導していく。

470 グレースホテル・外観

東京都心の高級ホテル。

480 同・ラウンジ

修也がコーヒーを飲んでいるとウエデ

イングプランナーの詩織がやってくる。

詩織「城ヶ崎様、お待たせしました」

修也「あの、真琴は？」

詩織「まだいらしてないですね」

修也「そうですか。ちょっと早く来すぎたか

な」

詩織「今日は厳選されたウエディングドレス

が披露されますから、お母さま、喜んでら

っしゃるのではないですか」

修也「親孝行になりますかね」

詩織「それはもう」

詩織は笑顔でこたえる。

490 熱田神宮会館・新婦控室

ものすごい勢いで着替えている真琴。

真琴の着替えの手伝いをしている由紀。

由紀「そんなにお急ぎにならなくても」

真琴「だからこのあと予定が」

由紀「当会館のことでしたら大丈夫ですので」

和葉が駆け込んでくる。

和葉「車、回してきた」

真琴「サンキュ、お姉ちゃん」

真琴は急いで出ていこうとする。

由紀「あ、あの！」

真琴は振り返って

真琴「なに？」

由紀「まだかつらが」

真琴「あ、そうだ。なんか頭が重いつつだ」

由紀は、真琴のかつらを外す。

真琴「大崎さん、いろいろありがとう。じゃ

あ！」

真琴は急いで出ていこうとする。

由紀「あの！」

真琴「今度はなに？」

由紀「髪、直しましょうか？」

真琴「新幹線の中で直すからいいです」

真琴は和葉と共に走って出ていく。

由紀「新幹線？」

500 名古屋駅前・ロータリー

和葉の運転する軽自動車は猛スピードでタイヤを鳴らせて入ってくる。

急ブレーキで止まると、真琴が勢よく出てくる。

和葉「気を付けてね！」

真琴「お姉ちゃん、ありがとう！」

真琴は駅に向かって走っていく。

和葉はやれやれという表情。

510 名古屋駅・東海道新幹線の改札

真琴が自動改札から出てくる切符をも

ぎ取り、ホームに向かって走っていく。

520 同・東海道新幹線ホームに向かう階段

発車のベルが鳴っている。

階段を駆け上がる真琴。

真琴「待って！ 待って！ その新幹線！」

53〇 同・東海道新幹線ホーム

走ってきた真琴が新幹線に駆け込む。

息を弾ませ、安堵の表情で席に向かう。

54〇 東海道新幹線・車内

真琴は座席に座っているが、窓の外を見ると一向に新幹線が名古屋駅から動く様子がない。

真琴は切符を見ると12時30分名古屋発と記載されているが、スマホで時間を確認すると12時33分。

立ち上がり、心配そうに車内を見渡す真琴。

車内アナウンス「浜松駅での信号機故障により、運転を見合わせます」

真琴「ええ……」

真琴は通りかかった車掌を引き止める。

真琴「あの、あとどれくらいで、名古屋を出

発しますか？」

車掌「それがまだわかりませんで」

真琴「私、東京で大事な約束があるんです」

車掌「お急ぎのところ、申し訳ありません」

真琴「結婚式に出なきゃならないんです。も

う時間ギリギリで」

車掌「主催者様にご連絡された方がよろしい

かと思えます」

真琴「私がないと始まらないんです」

車掌「え？」

真琴「私、新婦なんです」

乗客たちが一斉に真琴に注目する。

車掌「状況は随時車内放送でお伝えしますの

で。申し訳ありません」

車掌は頭を下げ去っていく。

力なくシートに座り、天を仰ぐ真琴。

真琴「終わった……」

そのまま少しして、真琴はスマホを出

し、和葉に電話をかける。

真琴「お姉ちゃん、もうダメみたい……」

真琴の瞳から一筋の涙がこぼれる。

550 グレースホテル・美容室・前

孝一が待っていると、ばっちりメイクとヘアスタイルを整えた美鈴が出てくる。

孝一「時間かけ過ぎだろ。今日は美鈴が主役じゃないんだからね」

美鈴「私は新郎の母。準主役よ。それに大泉総理もいらっしゃるんだから」

孝一「元総理な」

美鈴「どっちでもいいの」

560 名古屋駅・東海道新幹線ホーム

東海道新幹線がホームに停まっている。新幹線が信号機故障で運転見合わせているとアナウンスが流れている。

57〇 同・停車している東海道新幹線・車内

泣き疲れて目をつぶっている真琴。

その時、真琴の腕をつかむ手。

真琴「え」

真琴が目を開けると、その手は信雄だった。

信雄「東京、行くんだろう？」

真琴「お父さん、どうして……？」

信雄「結婚式のダブルヘッダーする花嫁がど

こにおるよ、まったく」

真琴「ごめんなさい、私……」

信雄は真琴を引っ張り

信雄「急がな」

真琴「どこ行くの？」

信雄「ええから、来い」

信雄は真琴を引っ張っていく。

58〇 同・東海道新幹線ホーム

止まっている新幹線から信雄が真琴を引っ張って出てくる。

真琴「ねえ、どこ行くの？」

信雄「東京へ急ぐんだろう？」

真琴「新幹線が一番早いって」

信雄「新幹線は止まっとるがや」

信雄は、真琴を引っ張っていく。

590 名古屋駅直上の高層ビル

エレベーターのドアが開き、信雄が真琴を引っ張って出てくる。

真琴「お父さん、どこ行くのよ」

信雄「ええから、ついてこやあ」

信雄は、真琴を引っ張って、階段を上がっていく。

階段を上り切り、鉄製のドアを開ける。

600 同・屋上・ヘリポート

鉄製のドアが開き、信雄が真琴を引っ張って出てくる。

ヘリコプターが駐機しており、その前に信雄の旧友・鵜飼昇（58）がいる。

鵜飼「おー、真琴ちゃん、大きゅうなったな」

真琴「あ……」

信雄「東海フライトの社長はオレと同級だで」

鵜飼「真琴ちゃん、オレのこと覚えとる？」

真琴「はい、ご無沙汰してます……」

鵜飼「昔はよく信雄の家にも遊びに行ったで

な。真琴ちゃんはまだ小さかったで」

真琴「はい……」

鵜飼「えらいべっぴんさんになって。どえり

やあ驚いた」

信雄「今日は社長が直々に操縦桿を握ってくれるでな」

真琴「え？」

鵜飼「ほら、花嫁さん、急いで行こまい」

信雄が真琴の背中を押すと、鵜飼が真琴をへりに案内する。

その時、和葉からLINEの着信があり、真琴はスマホを見る。

スマホ画面『こうなったら、お父さんに頼むしかないでしょ』

6 1 〇 グレースホテル・ラウンジ

孝一と美鈴がソファーに座っている。

孝一「真琴さんのご両親、なんか感じ変わったか？」

美鈴「名古屋の人なんて、みんなあんなものじゃない？」

孝一「おい、言い方」

美鈴「ねえ、私が選んであげた真琴さんのドレスを見にいきましょうよ」

孝一「事前に散々見たんじゃないの？」

美鈴は嬉しそうに立ち上がる。

6 2 〇 飛行中のヘリコプター・機内

操縦席に鵜飼、後部座席に真琴がいる。

真琴「本当にすみません。なんとお礼を言っているかい」

鵜飼は笑顔で

鵜飼「信雄の頼みだで、断れんがね」

真琴「……」

鵜飼「このへり、普段は遊覧飛行に使っとる  
でね」

真琴「そうなんですか」

鵜飼「ここでプロポーズする人もおるんだよ」

真琴「へえ……」

鵜飼「このへりのプロポーズの成功率は、1  
00%だでね」

真琴「すごいですね」

鵜飼「縁起のいいへりだで、真琴ちゃんも幸  
せな結婚になるがや」

真琴「でも私、どっちの親にも本当のこと言  
い出せなくて、あんな大芝居を打ってしま  
って……」

鵜飼「信雄はめちゃんこ喜んどった、真琴ち  
やんの結婚」

真琴「代役が相手の結婚式でしたけど」

鵜飼「まあ、ええて。真琴ちゃんの花嫁姿見  
られたで」

真琴「少しでも親孝行になったんでし  
ょうか？」

鵜飼 「十分十分。信雄と春子ちゃんが結婚式  
できんかったのは知っとる？」

真琴 「はい、聞きました」

鵜飼 「そうか」

真琴 「だからその分、両親の希望を叶えられ  
ればなど……」

鵜飼 「名古屋の親は、娘が熱田神宮で結婚式  
あげれば思い残すことはないでね」

真琴 「……」

鵜飼 「東京でも結婚式やらならない訳があ  
ったんやろう？」

真琴 「修也、あ、私の結婚相手なんですけど」

鵜飼 「修也さん」

真琴 「修也は養子で両親とは血が繋がって  
ないんです」

鵜飼 「そう」

真琴 「でも、ご両親はそんなこと一切感じさ  
せない親バカで」

鵜飼 「うん」

真琴 「ご両親の希望通りの結婚式をするのは、

修也の両親への恩返しなんです」

鵜飼「両家の親を喜ばそうなんて、真琴ちゃん、親孝行だでな」

真琴「でも、鵜飼さんにまで、とんだご迷惑をかけてしまつて……」

鵜飼「ええてええて。オレも真琴ちゃんの結婚式に参加させてもらったようなもんだで」と笑う。

630 グレースホテル・結婚式場・新婦控室

タキシードに着替えた修也とウエディングプランナーの詩織がいる。

奥にはウエディングドレスが用意されている。

その隣には色打掛が用意されている。

修也は心配そうに腕時計を見ながら

修也「まだ間に合いますかね」

詩織「もう少し待ちましょう」

修也「真琴が約束の時間に遅れることなんて

ないんですが……」

その時、ドアがノックされる。

修也と詩織はドアに注目する。

ドアが開いて美鈴と孝一が入ってくる。

修也「なんだ……」

美鈴「なんだとはなによ。ご挨拶ね」

修也「何しに来たの？」

美鈴「そろそろ花嫁がドレスを着たころかと  
思ってたね」

修也「それが、真琴がまだ来てなくて……」

孝一「え、そうなのか」

修也「もうなにやっつてんだ、真琴」

孝一「まさか結婚が嫌になって……」

修也「どうしよう本当に来なかったら……」

修也がうろたえていると

美鈴「修也！ 真琴さんを信じなさい」

修也「母さん……」

美鈴「真琴さんは言ってくれたのよ。結婚式  
が孝一さんと私への最初の親孝行だって。

だから、絶対にいいものにしたって」

修也「真琴が……」

美鈴「真琴さんは絶対に来る。真琴さんを信じて待ちましょう」

修也「真琴がいつそんなことを」

美鈴「うちに遊びに来た帰り際だったかしら」

孝一は用意されている打掛を見て

孝一「お色直しは着物にしようと、美鈴が提

案したんだもんな」

美鈴「真琴さんが喜んでくれるかなって」

修也「真琴が和装のこと言ってたから？」

美鈴「今日の主役は真琴さんと修也だからね」

640 グレースホテル・屋上ヘリポート

ヘリコプターが着陸する。

650 ヘリコプター・機内

操縦席に鶺鴒、後部座席に真琴がいる。

真琴「本当にありがとうございます」

鶺鴒「ほら、急いでいかな」

660 グレースホテル・屋上ヘリポート

真琴が建物の扉を開けようとして振り返ると、鶉飼は親指を立て合図し、へりを離陸させる。  
鶉飼に頭を下げる真琴。

67 ○ 同・結婚式場・新婦控室

修也と美鈴、孝一、詩織が待っている  
と、真琴が走って入ってくる。

修也「真琴！」

詩織「真琴さん！」

真琴は頭を下げて

真琴「遅くなってごめんなさい」

修也「心配したんだぞ」

真琴「本当にごめんなさい」

修也「こんな時間までなにしてたんだ」

真琴「ごめん……」

詩織「修也さん、まずは真琴さんの準備をさせて頂けますか？」

修也「ああ、はい……」

詩織「お着替えもありから、一旦外でお待ち

いただいてもよろしいでしょうか？」

修也「え、ああ……」

美鈴「修也、どーんと構えてなさい。結婚式は逃げないから」

修也は、美鈴と孝一に促されて控室を出ていく。

真琴「本当にごめんなさい。ご迷惑をおかけして」

詩織「いいんですよ。花嫁にはいろいろ事情がつきものですから」

真琴「え……」

詩織「すてきなお父さまですね」

真琴「まさか、父から連絡……？」

詩織は、真琴にウィンクする。

68〇 同・チャペル・中

たくさんの列席者に見守られて結婚式が行われている。

祭壇にはウェディングドレスの真琴とタキシードの修也。

修也が真琴のベールを上げ、キスをす  
る。

チャペルの中は拍手に包まれる。

69 ○ 同・外

列席者がチャペルからの階段通路をは  
さんで並んでいる。

チャペルの扉が開いて真琴と修也が出  
てくると、列席者からの祝福のフラワ  
ーシャワーを浴びる。

チャペルの向かいの通りでは、後から  
追いついた信雄と春子、和葉がその様  
子を見て拍手をしている。

フラワーシャワーを浴びながらチャペ  
ルの階段通路を、腕を組んでゆつくり  
と降りる真琴と修也。

真琴は視線を上げた瞬間、信雄と春子、  
和葉がいるのに気づく。

真琴の顔がぱあっと明るくなる。

(了)